

## 平成16年度普及に移す技術

[普及に移す技術名] 粒剤を用いた斑点米カメムシ類の防除

[要約] ジノテフラン粒剤の散布を基幹とし、斑点米カメムシ類の少発生地域での額縁防除および多発生地域での体系防除を開発し、斑点米の発生を少なくする。

[キーワード] ジノテフラン粒剤、斑点米カメムシ類、額縁防除、体系防除

[担当] 農業試験場・生産環境部・昆虫研究グループ

[連絡先] 電話 0776-54-5100、電子メール s-takaoka-sc@ain.pref.fukui.jp

[分類] 普及

---

### [背景・ねらい]

斑点米カメムシの新しい防除薬剤として、ドリフトの心配がなく、持続性があり、作物残留も少ないジノテフラン粒剤が開発されている。近年、斑点米カメムシ類の多発生に伴い品質の低下の著しい地域や、混住化が進み、で粉剤防除ができない地域が拡大している。このような地域において本薬剤を用いた防除方法を検討する。

### [技術の内容・特徴]

1. ジノテフラン粒剤の散布時期は、出穂7日後散布が出穂7日前や出穂期散布より斑点米の発生が少なく、最も効果が高い(表1)。
2. 水田内での斑点米の発生は、畦畔に近い所に多く、水田中央部に向かって減少する傾向がみられる(表2)。
3. 斑点米カメムシの少発生地域では、ジノテフラン粒剤10a当たり3kg相当を、水田内周辺部幅3mのみ額縁防除を行うことによって、斑点米の発生率を0.1%以下に抑えることができる(表3)。
4. 斑点米カメムシの多発生地域では、ジノテフラン粒剤による防除のみでは、斑点米の発生率が0.1%を超えてしまうため、粒剤散布7日後にジノテフラン粉剤を散布すれば、斑点米の発生率を0.1%以下に抑えることができる(表4)。

### [技術の活用面・留意点]

1. 少発生地域と多発生地域の区分の目安は、例年の斑点米発生率が、0.2%以下を少発生地域、0.4~0.7%(3等米レベル)を多発生地域とする。
2. ジノテフラン粒剤・粉剤ともに、使用量は10a当たり3kgとする。
3. ジノテフラン粒剤は水溶性が高く流亡しやすいため、散布時の水管理は、水深3cm程度の湛水状態で散布し、その後自然落水する。
4. 額縁防除を行う場合は、水田内幅3mの額縁部のみ10a当たり3kg相当を散布し、過剰散布にならないよう注意する。

[具体的データ]

表1 ジノテフラン粒剤の散布時期と斑点米の発生

供試薬剤名 処理時期	散布量 / 10a kg	斑点米発生率 %
ジノテフラン粒剤 出穂7日前	3	0.286
ジノテフラン粒剤 出穂期	3	0.197
ジノテフラン粒剤 出穂7日後	3	0.118
BPMC・PAP粉剤DL 出穂14日後	4	0.176
BPMC・PAP粉剤DL 出穂7日後 + 出穂14日後	4 + 4	0.088
無処理		0.523

品種:ハナエチゼン 出穂期:7月18日 収穫期:8月20日

表2 水田内での斑点米の発生分布

調査株の採取場所 (畦畔からの列数と距離)	斑点米発生率 %
1列目 (0.3m)	0.631
3列目 (0.9m)	0.544
5列目 (1.5m)	0.386
10列目 (3.0m)	0.178
20列目 (6.0m)	0.088

品種:ハナエチゼン 出穂期:7月22日  
カラムシ優占種:ホソハリカラムシ、トゲシラホシカラムシ

表3 斑点米少発生地域における防除効果

供試薬剤名 処理時期	処理方法	散布量 / 10a kg	斑点米発生率 %
ジノテフラン粒剤 出穂7日後	全面散布	3	0.033
ジノテフラン粒剤 出穂7日後	全面散布	2	0.052
ジノテフラン粒剤 出穂7日後	額縁散布 水田内畦畔から幅3m	3	0.054
BPMC・PAP粉剤DL 出穂14日後	全面散布	4	0.066
無処理			0.154

品種:ハナエチゼン 出穂期:7月20日 収穫期:8月24日 圃場 30 × 100m

表4 斑点米多発生地域における防除効果

供試薬剤名 処理時期	散布量 / 10a kg	斑点米発生率 %
ジノテフラン粒剤 出穂7日後	3	0.152
ジノテフラン粒剤 出穂7日後 ジノテフラン粉剤 出穂14日後	3 + 3	0.070
BPMC・PAP粉剤DL 出穂14日後	4	0.254
BPMC・PAP粉剤DL 出穂7日後 + 出穂14日後	4 + 4	0.131
無処理		0.542

品種:ハナエチゼン 出穂期:7月24日 収穫期:8月28日